

|||||
 原著論文
 |||||

福祉系学生の傾向と変化に対する初年次教育の展開
 ——初年次学生の調査結果から——

高島 恭子^{1)*}, 黒山 竜太²⁾
 原田 奈津子¹⁾, 柳 智盛¹⁾

(¹⁾長崎国際大学 人間社会学部 社会福祉学科, ²⁾東海大学総合教育センター, *連絡対応著者)

The Development of the First-Year Program Concerning
 the Tendency and Changes for Students of Social Work Department:
 From a Research for the First-Year Students

Kyouko TAKASHIMA^{1)*}, Ryuta KUROYAMA²⁾, Natsuko HARADA¹⁾
 and Jeesoung RYU¹⁾

(¹⁾Dept. of Social Work, Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University,
²⁾Liberal Arts Education Center, Tokai University, *Corresponding author)

Abstract

The purpose of this paper is to realize the tendency of the first-year students and to get suggestion for the First-Year Program. Research for the first-year students have been carried out periodically from 2007 and totally analyzed. It reveals the factors that affect students' feeling of adaptation in studying, in personal relations and in student life. It also shows the difference among administration years and the change by research time. As results, the important factors are suggested as follows; for students' feeling of adaptation in studying was 'self-assertion', 'ability to explain own opinions', and 'self-management of own life'; for feeling of adaptation in personal relations was 'connections to others', 'emotional stability', and 'coping with depression'; for feeling of adaptation in student life was 'coping with depression', 'ability to explain own opinions', 'confidence to own health', and 'comfortableness in university'. In their feeling of adaptation in studying, independent attitude in the second semester is significantly higher than in the first semester, and independent attitude tend to getting higher in recent years. Harmony of support for adaptation in academic life with professional education is needed in the approach to improve students' own competency.

Key words

adaptation in academic life, change, First-Year Program

要旨

大学初年次の学生の傾向を理解し初年次教育のあり方を考えるために、2007年度より1年次生に実施してきた定期調査の集計から、①学習面、対人関係面、学生生活面それぞれについての適応感へ与える影響、②入学年度間の比較、および月ごとの経過について分析し、各学年の特徴や月ごとの変化を明らかにした。その結果、学習適応への適応感には、他者への自己主張や意見の説明、生活の自己管理ができること、対人関係適応への適応感には、他者とのつながりや情緒的安定、憂鬱気分などへの対応、学生生活適応への適応感には憂鬱気分への対応、健康や意見を説明できる自信、大学内での居心地のよさが、それぞれ重要であることが示唆された。学習面において、主体的態度では、前期より後期で主体性が有意に高く、近年においては主体的態度が高まる傾向を示していた。大学生活への適応支援と専門教育とを融合させながら学生の力を育てる働きかけが必要と考えられる。

キーワード

大学適応、変化、初年次教育

1. はじめに

高等教育のユニバーサル段階を迎えていると考えられる日本において、初年次教育の重要性は既に広く認識されている。学会レベルにおいても2009年より「初年次教育学会」が設立され大会や学会紀要、ニュースレターなどにおいて活発な議論が進められている。「初年次教育」に関連して発表された論文数を CiNii から見ると、2003年に4本だったものが現在では620本と堅実な増加を示している(2013年11月5日検索)。初年次教育は、その対象像、方法やプログラム、効果等において高い関心を持たれているのである。また「今後の高等教育改革の推進方策について」の諮問(2001年4月11日)に対する中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月24日)においても「初年次における教育上の配慮」という項目が設けられた。この項では大学に「学習の動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育の導入・充実を図り、学士課程全体の中で適切に位置付ける」取り組みを期待することが述べられている。ここでの初年次教育は、「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」とされる。初年次教育は、高等学校までの履修状況に対する補修・補完授業とは異なり、新たな学校段階への移行のための支援であり、また、学士課程教育がユニバーサル段階としての量の拡大を積極的に受け止めつつ教育の質の維持・向上を図るための重要な要素の一つとされているのである。

初年次教育そのものについて取り上げた論文は多数あるが、CiNiiにて、「初年次」「福祉」で検索したところ、33件の論文があり、「初年次教育」「福祉」で検索をかけると28件となった(2013年11月5日検索)。内容をみると社会福祉の専門科目との関連などを扱ったものはまだ少ない。初年次教育、専門教育、キャリア教育といったつなぎをいかにスムーズに設定する

か、を専門職養成も担っている社会福祉教育全体で考慮していかなければならない。私たち人間社会学部社会福祉学科初年次教育研究会では、学科の共同研究費と援助を受けながら、2006(平成18)年度より本学科に求められる初年次教育のあり方の検討を進めている。2006年度は文献研究から、初年次教育には学問的スキルに関する一面と心理的発達に関わる一面があること、保健関係部門等の他部門及び物理的環境整備も含めた全学的な取り組みが必要であることを指摘した¹⁾。またこの時点での先行研究における調査票をもとに本学独自の調査票を作成し、2007年度からは1年次生を対象としたアンケート調査を実施している。私たちの継続的な調査研究は、事例研究的な発表論文が多い中で、貴重なものとなっている。

これらのことを背景として本論文では、2007年度より1年次生に実施してきた定期調査の集計から、①学習面、対人関係面、学生生活面それぞれについての適応感へ与える影響を探ること、②入学年度間の比較、および月ごとの経過について分析し、各学年の特徴や月ごとの変化を明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

調査の対象

A大学社会福祉学科に所属する2007年度、2008年度、2010年度、2011年度1年生(それぞれ51名、55名、54名、36名)合計196名を調査の対象とする。2009年度は学科の事情により調査を実施していない。

調査の手続き

1年生の必修科目である「教養セミナー」の時間に、各担当教員を通じて調査の目的や回答方法について説明を行い配布し、即時あるいは1週間以内を原則にクラスごとに回収した。

回答用紙には学籍番号の記入を求め、各回での個人の回答の対応が取れるようにしたが、入力は教養セミナーの担当教員外の人によって行

われることを説明した。

調査の時期

各年度4月、7月、10月、1月の年に4回実施した。4月は「入学直後でフレッシュマンセミナーの前」、7月は「前期試験前」、10月は「夏休み後」、1月は「冬休み後、後期試験前」として設定されたものである。

調査の内容

質問紙は、濱名ら²⁾などを参考に学習面24項目、対人関係面11項目、学生生活面15項目、合計50項目で作成し、「1）そうである～4）そうではない」の4件法によって回答を求めた。また各側面には「～面はうまくいっている」という適応感についての質問を含めた。

3. 結果と考察

分析1) 学習面、対人関係面、学生生活面の各側面への適応感に及ぼす影響

「学習適応感（現在、学習面はうまくいっている）」、「対人関係適応感（現在、人間関係はうまくいっている）」、「学習生活適応感（現在、生活全般はうまくいっている）」のそれぞれを従属変数、その他の項目を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を実施した。

学習適応への適応感に及ぼす影響については9項目が有意に抽出され（調整済み R2 乗：.26）、それぞれ「自分の意見をわかりやすく説明できる (.19)」、「規則正しい生活をしている (.13)」、「物事に粘り強く取り組める (.12)」、「学力に自信がある (.12)」、「板書をノートに書くようにしている (.12)」、「授業の予習をしている (.11)」、「履修する科目の選び方で困った (-.10)」、「授業の出席程度で困った (-.08)」、「日ごろから図書館を利用している (.07)」であった（表1-1）。

他者への自己主張や意見の説明、生活の自己管理ができることなどが重要であることが示唆された。

表1-1 学習適応への適応感に及ぼす影響

項目	R
自分の意見をわかりやすく説明できる	.19***
規則正しい生活をしている	.13***
物事に粘り強く取り組める	.12**
学力に自信がある	.12**
板書をノートに書くようにしている	.12**
授業の予習をしている	.11**
履修する科目の選び方で困った	-.10**
授業の出席程度で困った	-.08*
日ごろから図書館を利用している	.07*
調整済み R2 乗	0.26

* : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

対人関係適応への適応感に及ぼす影響については10項目が有意に抽出され（調整済み R2 乗：.34）、それぞれ「友人がいない・少ないことで困った (-.30)」、「友達と一緒によく勉強する (.14)」、「情緒面の安定に自信がある (.13)」、「他人の気持ちの理解に自信がある (.12)」、「授業によく遅刻する (-.12)」、「憂鬱で気分の落ち込みを感じる (-.11)」、「わからないことを辞書で調べられる (-.10)」、「証明書発行手続きを理解 (.09)」、「自身を大切にしている気持ちがある (.08)」、「物事に粘り強く取り組める (.08)」であった（表1-2）。

表1-2 対人関係適応への適応感に及ぼす影響

項目	R
友人がいない・少ないことで困った	-.30***
友達と一緒によく勉強する	.14***
情緒面での安定度に自信がある	.13**
他人の気持ちの理解に自信がある	.12**
授業によく遅刻する	-.12**
憂鬱で気分の落ち込みを感じる	-.11**
わからないことを辞書で調べられる	-.10**
証明書発行手続きを理解	.09**
自身を大切にしている気持ちがある	.08*
物事に粘り強く取り組める	.08*
調整済み R2 乗	0.34

* : p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

他者とのつながりや情緒的安定、憂鬱気分などへの対応などが重要であることが示唆された。

学生生活適応への適応感に及ぼす影響については11項目が有意に抽出され(調整済み R2乗: .31)、それぞれ「憂鬱で気分の落ち込みを感じる (-.19)」、「自分の健康への自信がある (.17)」、「自分の意見をわかりやすく説明できる (.10)」、「大学内施設の利用法理解 (.10)」、「友人がいない・少ないことで困った (-.10)」、「他人の気持ちの理解に自信がある (.10)」、「友達とよく一緒に勉強する (.09)」、「規則正しい生活をしている (.08)」、「授業をよくさぼる (-.07)」、「新聞ニュースを見ている (.07)」、「情緒の安定度に自信がある (.07)」であった(表1-3)。

表1-3 学生生活適応への適応感に及ぼす影響

項目	R
憂鬱で気分の落ち込みを感じる	-.19***
自分の健康への自信がある	.17***
自分の意見をわかりやすく説明できる	.10**
大学内施設の利用法理解	.10**
友人がいない・少ないことで困った	-.10**
他人の気持ちの理解に自信がある	.10**
友達とよく一緒に勉強する	.09**
規則正しい生活をしている	.08*
授業をよくさぼる	-.07*
新聞ニュースを見ている	.07*
情緒面での安定度に自信がある	.07*
調整済み R2 乗	.31*

*: p<.05 ** : p<.01 *** : p<.001

憂鬱気分への対応、健康や意見を説明できる自信、大学内での居心地のよさが重要であることが示唆された。

分析2) 入学年度及び実施月ごとの比較

学習面・対人関係面・学生生活面それぞれについていずれも最尤法・プロマックス回転によ

る因子分析を行った。

- ① 学習面においては、6因子が抽出(累積寄与率51.92%)され、「授業への消極的態度(3項目)」「学習意欲(2項目)」「学習不足への正当化(2項目)」「履修方法への困惑(2項目)」「情報収集力(3項目)」「主体的態度(2項目)」と命名した。
- ② 対人関係面においては2因子が抽出(累積寄与率36.21%)され、「自己信頼感(3項目)」「集団適応感(2項目)」と命名した。
- ③ 学生生活面においては、3因子が抽出(累積寄与率56.43%)され、「怠学傾向(2項目)」「キャンパス活用(3項目)」「援助希求(2項目)」と命名した。

さらに、学習面における入学年度×実施月の2要因混合計画による分散分析(以下 p<.05で差が有意な箇所のみ表示)を行った結果、授業への消極的態度(M: 2.72 SD: 0.82)においては、2008年度生のみ他年度生と比べ消極的態度が有意に高かったが、時間経過による変化はほぼ見られなかった。また、学習意欲(M: 3.12 SD: 0.74)においては、いずれも有意差が見られなかった(表2-1)。

表2-1 授業への消極的態度

学年の主効果: 有意	
多重比較: (学年)	2008>2007・2010・2011
実施月の主効果: n.s.	
交互作用における単純主効果: 有意	
多重比較:	4月 2008>2007・2010・2011
	7月 2008>2007・2010・2011
	10月 2008>2007・2010・2011
	1月 2008>2007・2010・2011
	2007 10月>4月
	2010 4・7・10月>1月

学習不足への正当化(M: 3.31 SD: 0.60)に

おいては、後期に入り正当化が有意に高くなった（表2-2）。

表2-2 学習不足への正当化

学年の主効果：n.s.
実施月の主効果：有意
多重比較： (実施月) 10月・1月 > 4月
交互作用における単純主効果：n.s.

履修方法への困惑 ($M: 2.40$ $SD: 0.64$) の場合、実施年度全体を通しては、後期において前期よりも困惑感の減少がみられたが、2010年度と2011年度においては後期に困惑感が増加している（表2-3）。

表2-3 履修方法への困惑

学年の主効果：有意
多重比較：(学年) 2010 > 2007・2008
実施月の主効果：有意
多重比較：(実施月) 4月 > 10月
交互作用における単純主効果：有意
多重比較： 7月 2010 > 2007
10月 2010・2011 > 2007
1月 2010・2011 > 2007・2008
2007 4月 > 7月・10月・1月

情報収集力 ($M: 2.47$ $SD: 0.74$) においては、4月に比べ調べる力に自信が増加していることと、近年は情報収集力への自信が高まった結果となった（表2-4）。

主体的態度 ($M: 2.33$ $SD: 0.72$) では、前期より後期で主体性が有意に高く、近年においては主体的態度が高まる傾向を示している（表2-5）。

対人関係面における入学年度×実施月の2要因混合計画による分散分析を行った結果、自己信頼感 ($M: 2.21$ $SD: 0.63$)、対人コミュニケーションへの自信 ($M: 3.00$ $SD: 0.64$) において

表2-4 情報収集力

学年の主効果：有意
多重比較：(学年) 2010 > 2007・2008、2011 > 2007
実施月の主効果：有意
多重比較：(実施月) 7月・10月・1月 > 4月
交互作用における単純主効果：有意
多重比較：4月 2011 > 2007
7月 2010 > 2008 > 2007、2011 > 2007
10月 2010 > 2007
2007 1月 > 4月・7月、10月 > 4月
2008 7月・10月・1月 > 4月
2010 7月・1月 > 4月、10月 > 4月
2011 7月 > 4月

表2-5 主体的態度

学年の主効果：有意
多重比較：(学年) 2010・2011 > 2007・2008
実施月の主効果：有意
多重比較：(実施月) 10月・1月 > 4月・7月
交互作用における単純主効果：有意
多重比較：10月 2010・2011 > 2007・2008
1月 2010・2011 > 2007・2008
2007 4月 > 7月・10月・1月
2010 10月・1月 > 4月・7月
2011 10月・1月 > 4月・7月

はいずれも有意差は見られなかった。

学生生活面における入学年度×実施月の2要因混合計画による分散分析の結果からは、怠学傾向 ($M: 3.52$ $SD: 0.67$) において有意差が見られた（表2-6）。

表2-6 怠学傾向

学年の主効果：n.s.
実施月の主効果：有意
多重比較：(実施月) 1月 > 7月・10月 > 4月
交互作用における単純主効果：n.s.

キャンパス活用への準備性 ($M: 2.21$ $SD: 0.67$) においては、4月に大学での居心地が増した結果となった(表2-7)。

表2-7 キャンパス活用への準備性

学年の主効果: n.s.
実施月の主効果: 有意
多重比較: (実施月) 7月・10月・1月 > 4月
交互作用における単純主効果: n.s.

援助希求 ($M: 2.94$ $SD: 0.68$) では、いずれも平均値が低く、有意傾向であった(表2-8)。

表2-8 援助希求

学年の主効果: n.s.
実施月の主効果: n.s.
交互作用における単純主効果: 有意傾向

4. ま と め

大学適応のカギとなるのが、安定した生活リズムの構築であり、さらに、自己についての自信をつけることが重要となる。「規則正しい生活」は心身の健康維持のために欠かせない要素であると知られている。これまでの生活から変化し新たに構成されていく大学生活について、自分の大学生活を管理し、それを「できている」と感じ、自信をつけることが大切である。変化は4月から7月において顕著にみられた。4月から7月にかけての適応支援がより重要である。入学年度による差異がみられ、2008年度生が他の年度とは異なる傾向を示していた。年度ごとに学生の傾向を捉えつつ教育内容や支援を組み立てる必要がある。継続的調査による学年傾向の把握は、その後の教育的介入に活かすことが可能である。

一方で、大学生活の経過により「慣れ」が生じ、安心からか怠けてしまうことにどう対処すべきか検討していく必要がある。大学生活に移

行すると、学業だけではなくサークル活動やアルバイトなど生活の幅が広がり大学生らしい生活を個々に組み立てることになる。生活のバランスをとるための支援や介入が求められているようにも見えるが、自己についての自信をつけるためには、自分自身で生活のバランスを管理する力を育てることが必要である。大学での先輩との関係やつながりなど、学生の力を育てる視点からの環境整備も方法の一つと考えられる。

福祉系学生として、これらの特徴を踏まえた教育、専門教育について考えていかねばならない。具体的には、利用者とのラポール形成に必要なコミュニケーション能力を高めるようなグループワーク等の実践や、知識や技術を応用できるように事例を用いた教育などをこれまで以上に積極的に取り入れていかねばならない。また、人が暮らすという基本的な事項、つまり「暮らしや生活のスキル」についても理解し、さまざまな人への支援の際、動けるようにしておくことも重要となる。

本学科における初年次教育に求められる要素には、自己管理能力と自分の意見を述べ他者と学び合える関係を築く能力の向上のための要素が含まれるべきであろう。大学生活への適応支援と専門教育とを融合させながら、また教育内容と教育環境整備の両面から、学生の力を育てる働きかけが必要と考えられる。

5. 今後の課題

学生の状況には入学年度による差異がみられ、各学年の傾向の継続的調査による把握は、その後の教育的介入に活かすことができると考えられた。質問項目を精査し、より初年次教育の実態がわかるような調査票を作り上げる必要がある。また、これまで行った調査を踏まえて、男女ごとの特徴の抽出、福祉系以外の学問領域の学生との比較を行うことも検討したい。今後は、結果の活用について、実践的な初年次教育プログラムの検討と効果を測ることも求められる。

付 記

本稿の概要は、大学教育学会第34回大会部会11初年次教育・教養教育（平成24年5月27日北海道大学）において発表した。また本稿は、2012年度長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科共同研究費の助成を受けている。

本論文はこれまでの研究会活動の成果に基づくものである。研究会活動に参加いただきました方々、ご協力いただきました方々に感謝申し上げます。

本研究会のメンバーは下記の通り。

2006年度：石倉健二、山岸利次、熊谷賢哉、井上美代子、原田奈津子、高島恭子

2007年度：石倉健二、高島恭子、原田奈津子、山岸利次

2008年度：原田奈津子、高島恭子、山岸利次、黒山竜太、井上美代子、熊谷賢哉、石倉健二

2009年度：原田奈津子、高島恭子、黒山竜太、井上美代子、熊谷賢哉、石倉健二

2010年度：原田奈津子、高島恭子、黒山竜太、益田仁

2011年度：黒山竜太、原田奈津子、高島恭子、益田仁

2012年度：原田奈津子、黒山竜太、高島恭子

2013年度：高島恭子、原田奈津子、柳智盛

引用文献

- 1) 石倉健二, 高島恭子, 原田奈津子, 山岸利次 (2008) 「ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題」『長崎国際大学論叢』第8巻, 167-177頁
- 2) 「ユニバーサル高等教育における導入教育と学習支援に関する研究（平成13年～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)）」